

# 脊椎、股関節、膝関節疾患患者に対する転倒転落防止パンフレットを用いた 指導による意識の変化

キーワード 転倒転落・意識・パンフレット

1 病棟 7 階西

山本正規 石光美紀 福島正子 神杉政志 (1 病棟 3 階西) 藤里美子

## I. 研究動機

当科では、院内の転倒転落予防対策に添って、転倒転落防止に努めている。転倒転落は院内のインシデント報告の、1・2 位を占めており、当科の平成 18、19 年度で計 66 件の転倒転落が発生していた。その原因は、整形外科疾患特有の転倒転落要因と患者の意識の低さにあるのではないかと考えた。そこで、過去のデーターを基に、転倒転落の要因を分析し、当科特有の転倒転落防止を促がすパンフレットを作成し指導を行う事で転倒転落防止への意識づけができるのではないかと考え研究に取り組んだ。その結果、意識の改善が見られたので報告する。

## II. 研究方法

### 1. 研究期間

平成 20 年 4 月から平成 20 年 11 月

### 2. 対象

脊椎疾患患者 19 名、股関節疾患患者 3 名、膝関節疾患患者 1 名 計 23 名

男性 10 名、女性 13 名 平均年齢 68.5 歳

### 3. 方法

方法 1) 平成 18 年度、19 年度の当科での転倒転落について、インシデントレポートと看護記録から要因を明らかにし、グラフ化したパンフレット①を作成した。(図 1～2)

方法 2) 要因を基に転倒転落防止について注意点を記載した当科特有のパンフレット②を作成した。内容は、自己判断の危険性、下肢筋力低下予防方法、安全な履物、正しい歩き方、正しい車椅子使用方法、起床時の注意点について記載した。

方法 3) 入院時の独自で作成したアンケートを用いて転倒転落について意識調査を行った。

アンケートの内容は①自分は転倒しやすいと思うか②入院中の履物について③転倒転落を起こさない為に注意している点はあるか④移乗時に看護師の見守りが必要な場合きちんとナースコールが押せるか⑤パンフレットの有効性の 5 点について調査を行った。回答方法は選択方式、自由記載方式を使用した。

方法 4) アンケート終了後、①、②のパンフレットを使用し、(図 3) 院内のパンフレットに加え、転倒転落防止の指導を行った。指導は看護研究メンバーで行った。

方法 5) 精査目的の患者には入院して 1 週間後、手術目的の患者には離床時に、再度同様のアンケートを行った。

方法 6) アンケート結果を集計し、ウィルコクソンの符号付順位和検定 (以下検定とする) を行った。

### Ⅲ. 倫理的配慮

個人が特定できないこと、研究以外の目的で情報を使用しないこと、研究終了後情報を処分すること、研究に同意されなくても一切の不利益は蒙らないことを説明し署名で同意を得られた患者に施行した。

### Ⅳ. 結果及び考察

過去二年間の転倒転落インシデントレポートを集計した結果は、疾患では脊椎、股関節、膝関節疾患の順に多く、全体の8割近くを占めていた。症状では、下肢筋力低下、疼痛、痺れなどの症状がある患者に転倒転落が起きていた。転倒転落を起こした9割の人が、補助具に車椅子を使用していた。4割の人が、移動時に看護師の付き添いが必要であるにも関わらず自己判断で移動した際に発生していた。(図1. 2)

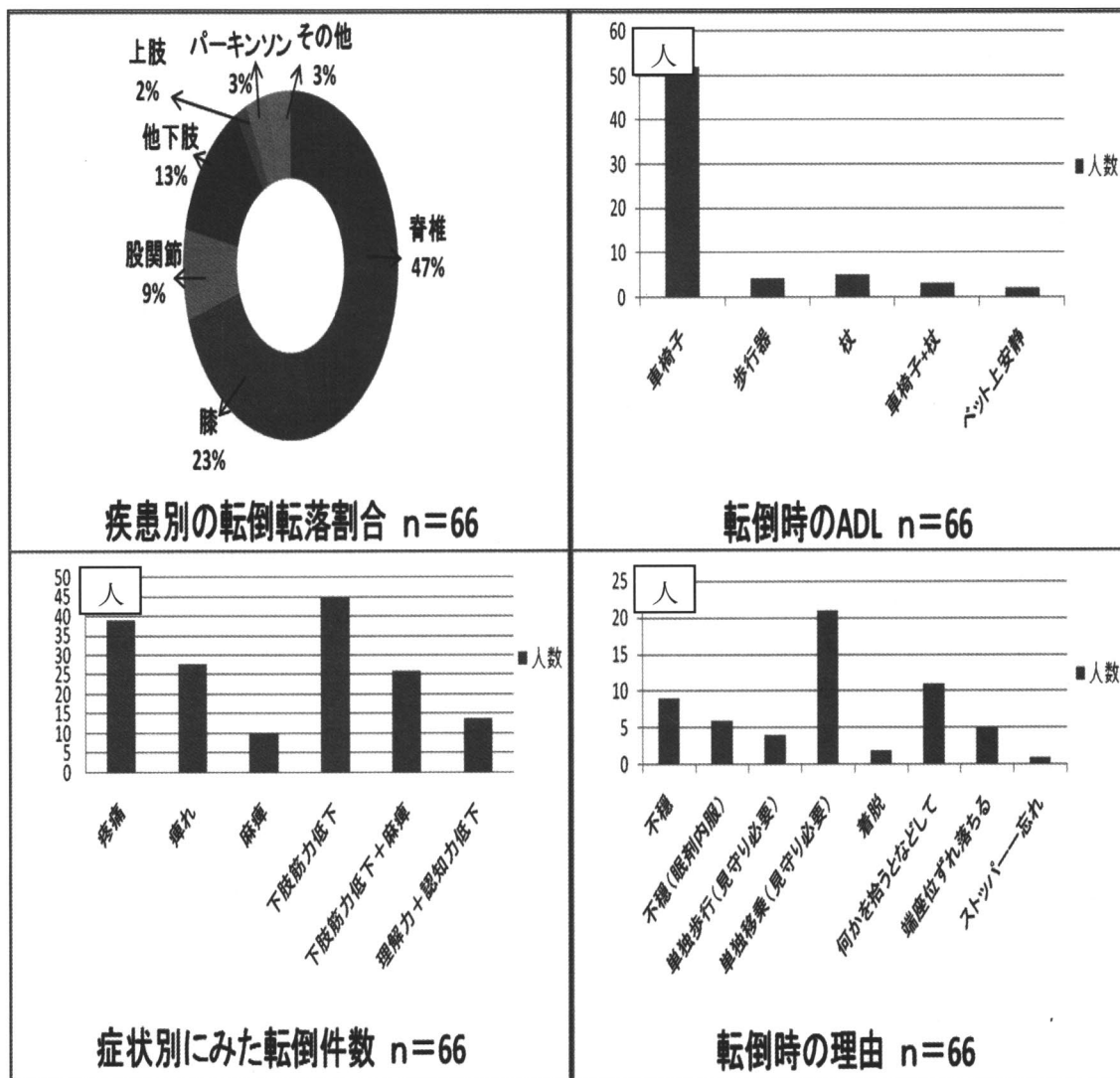


図1 パンフレット①表


図2 パンフレット①裏

## 転倒転落のない安全な入院生活を送るために

### I 自己判断は危険です!!

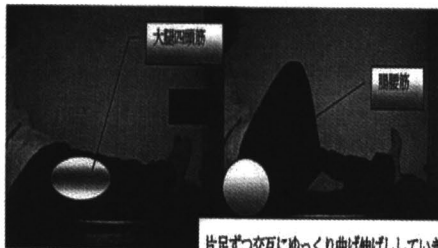
看護師で見守りが必要な患者様が、一人で移動、歩行した時に転倒する事がよく見られます。



 患者様一人での移動は看護師の許可があるまで控えて下さい。  
2年間の転倒転落の集計では、4割がこのような理由です。

### II 1週間の安静で20%の筋力がおちます。

大腿四頭筋、腸腰筋を鍛える。



片足ずつ交互にゆっくり曲げ伸ばししていきましょう。

膝や腰に負担ある人は、膝下に枕を入れて行いましょう。

### III 履物について

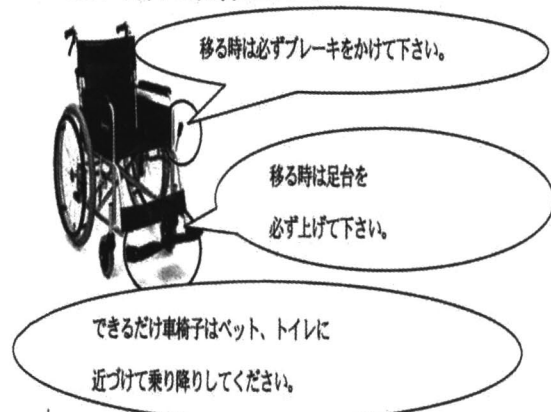
- 踵のしっかりした靴を選びましょう。(踵のある脱げにくい靴)
- サンドルやスリッパは脱げてしまう可能性が高いのでやめましょう。
- できるだけ、接地面積の広い靴が望ましい。(安定性がよい)



### IV 正しい歩き方について



### V 正しい車椅子の乗り降りについて



※看護師の許可があるまで車椅子の乗り降りは一人で行わないで下さい。

### VI 夜間目が覚めた時、起床時、トイレ時に、転倒転落が多い結果がでています。

※トイレへの切迫感から焦ってしまい転倒転落が起こりやすいです。

時間にゆとりを持ちましょう。

看護師見守りが必要な方は、ギリギリまで我慢せずに早めに呼んで下さい。

図3 整形独自のパンフレット②

アンケートを用いて意識調査を行った結果、自分は転倒しやすいかの問いに、パンフレット説明前後で違いはなく検定でも有意水準5%で有意差はみられなかった。具体的には、精査目的の患者に変化は見られなかった。しかし、術目的の患者においては、足が上がるようになった、症状がなくなったなど、症状の改善がみられたことで、転倒すると思わないという意識へ変化が見られた。症状の改善により転倒転落への意識が低下したと考える。

入院中の履物については脱ぎ履きしやすいという理由で、スリッパ、サンダルを使用していたが説明後は16人から4人に減少し、安定したシューズ、上靴を履いている人は5人から19人に増加した。(図4) 検定の結果、有意水準5%で有意差がみられた。この結果より指導の効果がみられ安全な履物への意識づけができたと考える。

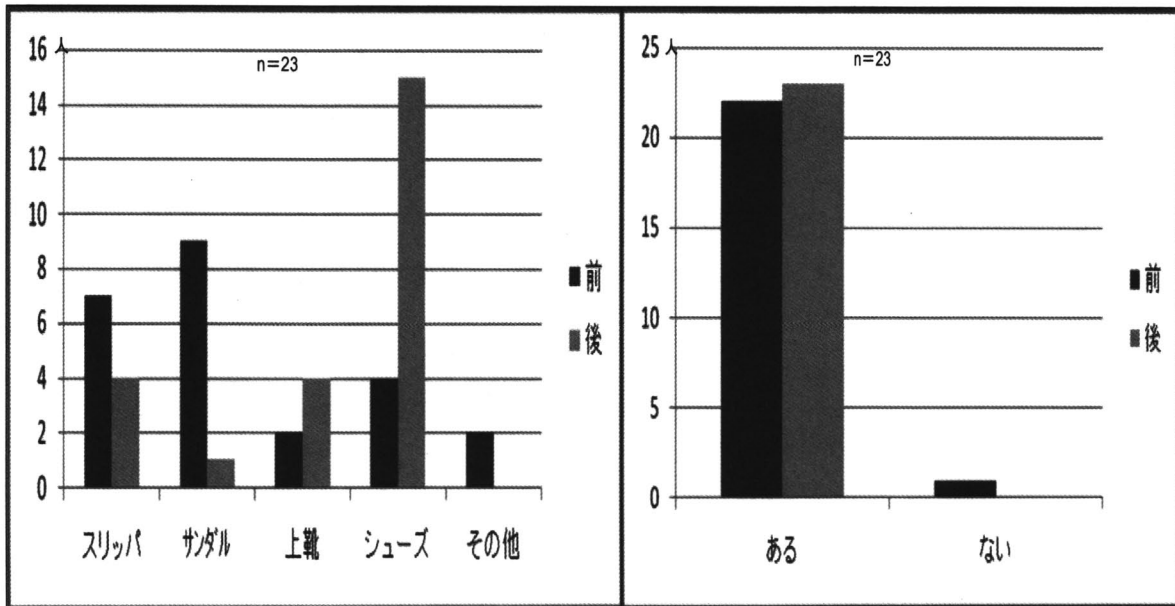


図4 入院中の履物

図5 転倒しないように注意している点

転倒しないように注意している点はあるかの問いについては、パンフレット説明前後共に約9割の患者が転倒しないように気をつけていると答え変化は見られなかった。しかし自由記載の内容を見ていくと、説明前後でゆっくり歩く、注意して歩く、時間に余裕を持って行動するなどの具体的でない意見が12人から8人へ減少し、暗い所は目を慣らしてから歩く、歩くときは踵から降りるなどの具体的な意見は10人から16人に増加した。パンフレットの説明後は具体的な意見が増えて転倒転落への意識づけができたと考える。

移乗時に看護師の見守りが必要な場合、危険性を理解してナースコールを押すことができるかの問いについては説明前はできると回答した人が9人だったが、説明後は18人に増加した。押せない人の理由の多くは、気兼ね、遠慮であった。検定の結果有意水準5%で有意差がみられた。この結果より、指導の効果があり自己判断の危険性について意識づけができたと考える。

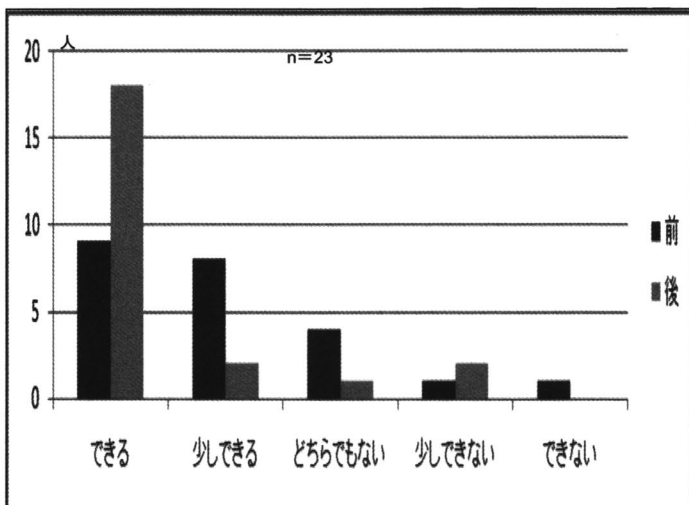


図6 移乗時に看護師の見守りが必要な場合、危険性を理解しナースコールを押すことができるか

パンフレットの有効性については、解った、少し解ったという患者が16人で約8割を占めていたが具体的に問うと答える事はできなかった。その理由として、適切な時期にもう一度説明してほしかった、忘れてしまったなどの意見が聞かれた。今後はパンフレットの説明回数、時期、方法に関しての検討が必要であると考えます。

## V. 結論

1. 過去の転倒転落の要因を明らかにした。
2. 転倒転落の要因のパンフレット①と転倒転落防止の整形独自のパンフレット②を作成した
3. 転倒転落防止の意識が向上した。
4. 今後はパンフレット説明の回数、時期、方法の検討が必要である。

## 参考文献

- 1) 泉キコ子：エビデンスに基づく転倒・転落予防，EBNBOOKS，初版第1刷，2005.
- 2) 中野正博：看護・保健・医療のための新楽しい統計学～看護研究実践編，ヘルシティ，2007.
- 3) 五十嵐歩，近藤真由美，山下悦子ら他：新しい視点で取り組む転倒・転落対策，Expert Nurse, Vol.23, No3, 112-129, 2007.